
十三矢モコは黄色い月に唾を吐く

シラカベヒロ氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十三矢モコは黄色い月に唾を吐く

【Zコード】

Z2837M

【作者名】

シリカベヒロ氏

【あらすじ】

神様と呪いとおばけと炭酸飲料。失せ物も待ち人も見つからないなら自分で探す。十三矢モコはおみくじなんて引かない。

1 朝食はいつも目玉焼き

「そこ、早くどかねーと凄まじい死に方するよあんた」「これでもかと曇った生暖かい春の日。

授業開始五分前。校門くぐつて数秒後。

遅刻寸前人気もまばらな校門付近午前九時前。

はらりと突然ほどけた靴紐を結び直していた僕は、背後から死を宣告された。

振り返る。バカみたいに髪の長い女の子が、コーラのペットボトル片手に僕を見下ろしていた。真っ黒でまっすぐ黒カーテンみたいなそれは、ぬるく吹く湿った風にぶわぶわ揺れていった。

「髪なが」

つい思つたことを、そのまま言つてしまつた。

女の子は、小さく鼻ではつと笑うと、

「なげーだろ？ ケツまであるからね」これ

自慢げに髪の先端を掴み束ね、ふりふり見せびらかした。というか、女子の口から出たケツつて単語に、僕は少しだまきました。

「えと、で、僕がなに？」

「そこいたら死ぬよつて言つてんの」

「うん、いや、なんで？」

僕の疑問に彼女は答えず、代わりにでかいため息をつく。

「あんたあれだ。かなりにぶいタイプだ」

「いや、わかんないけど」

女の子はよいしょっとだるそつに身を屈め、顔の高さを僕に合わせた。鼻と鼻の距離、目測三十センチ。

じいっと僕を見つめる大きな黒目。

が、あるべき部分が、黄色かつた。

白田の中に黄色い黒目。もはや黄目。

「田」思わず声が出た。

「え？……あ」白と黄の両方が、ぐるっと丸くなる。

「目玉焼き、みたいな、目玉だね」

「……は？」ぽかんと口を開ける女子。

「ふわ、と大きく風が吹いた。

四月半ば過ぎだというのに、ほぼ散りかけている校門脇の桜から、申し訳程度の花びらが舞つて彼女の唇にくっつく。

ペル。控えめにそれを舌で拭つ少女。半笑いで僕を見る。

「目玉焼きい？」

「いや、目が黄色いから」

「わかるけどや」

「ハーフ？」

「バカじゃねーの」

くすくす笑いながらキャップをはずし、コーラを一口飲むと、彼女はすっと僕を指差した。

「ね、あんた名前は？」

「あ、七月。^{ななつき}七月那由多。^{ななつのかなゆた}です」なぜか敬語を使つた僕。

「あたし十二矢モコよろしく。でさ七月^{とみや}」

「あはい」

「早く立ちなよ。遅刻しちゃうんじゃないか、僕だけじゃなくて。」

「え、あ、はあ」確かに。靴紐をちぢちぢつと片付ける。

僕と同じく遅刻寸前で焦る生徒達が、少女の後ろを次々駆け抜け行つた。腕時計を見る。あと一分。彼女は腕を組んだまま動かない。

「というか自分も遅刻しちゃうんじゃないか、僕だけじゃなくて。そもそも何年生だろう、この子。こんなに髪が長い女子、見かけたことない。でも万が一、上級生だったら、タメ口きいたのはまさかつたかも知れない。にやにやと笑みを浮かべる彼女を見上げながら、僕はゆっくり腰を上げた。

「ん。あれ」

立てない。

体が異様に重たい。

手も足も、ぴくりとも動かない。動かせない。

がつと上から大きな手で押さえられつつ、通常の何倍もの引力で引っ張られているような。まるで地面に固定されている感覚。金縛り、という言葉が頭に浮かぶ。同時に僕は、またか、と軽くため息をつく。

「立てない？」

「うん、なんか、ちょっと」

腰だけ上げたクラウチングスタート的ポーズで、ぐいぐい揺れる

僕を見下ろし、モコといふ子は、

「ま、そりや立てねーだろ? さも当然のよつこいつ。

「どういづこと」

「これ飲んだらわかる」

ずいっとコーラが僕の眼前に出てきた。

くれるのは嬉しいし、コーラは好きだけど、果たして今、僕はこれを飲むべきタイミングだらうか。全然そうじやないと思う。

とりあえず彼女の親切を無下にしないよう、やんわり遠慮しようとして口を開けた瞬間、がこつとボトルの飲み口を思ついてねじ込まれた。飲み口びこりじやない。ボトルの上部五分の一、入つてゐる。

「う、えぼ、ぐつ」

吐く一步手前ぐらいの勢いで僕は嘔吐いた。自分の意思と無関係に喉を走り抜けるしゅわしゅわ感。爽やかを強制されるつて、拷問になり得る。

「がふ、うつ」

これ以上なじくらむせて、口の端からコーラを噴出させてしまふ。そこでようやく、ペットボトルが乱暴に引き抜かれた。口からだぼだぼ溢れたコーラが地面へ零れ落ちていく。

軽くマーライオンみたいになつてる僕を見ながら、モコは特に悪びれる様子もなく、たらつとしゃがんで顔を突き出した。鼻と鼻の

距離、目測、十センチ。

「ふーん」

黄色い田に僕が映っている。

「……なに？」

「たしかに、田玉焼きみたいに見えるなーって」

「え？」

「はいこ対面」

モコは胸ポケシットからちつちつとパンクの手鏡を取り出して、僕の前にかざした。

映っているのは、例の黄田。

でもこれは、僕の田だ。

始業のチャイムが、じろとじろると、遠くで鳴り響いていた。

「え……これ、なんで」

「意外と似合つてんじゃん、黄色い田」

「え、そつかな。……じゃなくて」

まんざらでもないようなリアクションをした僕を見て、へへへとモコは嬉しげに笑った。

「ま、それ、しばらくすれば元戻つから」

「やうなの？」

「よし七月、その田玉焼きで自分の足元見てみよー」

言われるまま、反射的に足元に田をやる。

黒い沼、と一瞬思った。違う。

煙だ。

どす黒い、どす黒い煙が広がり、僕の両手足をすっぽり包み込んでいた。

「あ」

思わず声を上げてしまったものの、意外とそこまで驚かなかつた自分に逆に驚いた。むしろちょっと腑に落ちた。そうか、動けないときつて、こうこうのこ、いつそれでたんだ。ずっと。

「じゃ次。そっち、桜んとに見てみ」

観光バスの乗客みたく、言われるまま桜の木を見上げる。

「あ」

あ、ばっかで芸のない僕のリアクションはさておき、今度は普通に驚いた。

桜の大木を、大木級にでかい人間 の形をした黒い煙の集合体が、ゆさゆさ揺すつっていた。

風で舞つてゐると思っていた花びらは、このもやもやした黒い巨人が散らしてたものだつたらしい。なんとも風情がない。

「見えたー？」

「見えた」というかなんで見えるようになつたんだろう。「コーラだろうか。凄いな」「一ラ。

「もうじきあのでけー黒い男が、あんたに向かつて木を倒す」「えーてか男なんだ、あれ。性別あるんだ。

「あんたはその下敷きになつて凄まじい死に方をするつてオチ」「はあ」落ちない。腑に。

「運がねーなあ七月。あはは」

「あ、はは。ていうか、あの黒いのは、なんで僕を?」「

「さあ? おばけの考えることなんて知つたこいつちやねーよ

「あ、そう」

……あ。

おばけなんだ、あれ。やつぱり、というか。

この黒いもやもやはそういう、非科学的な類なんぢやないかと薄々思つてたんだけど、いつも堂々断言されると（それも目の黄色い子に）なんだかとても信憑性が出てくる。

おばけは存在するという事実。

この数年間、自分に降りかかってきた、色々。

一つの点が線になりそつて、ならなさそつて、あれこれ考えを巡らせていると、

「で、どーする?」このまま死ぬか?」

モコが田をぎらぎらさせ、真つ白い歯をにこやかに見せた。

ゆせゆさからぐらぐらへ、巨人の揺らす激しさは増していく。

花びらが舞い、僕らの周りをびゅんびゅん飛び回る。

みし。

みつし。

揺れる大木から、不穏な音が一度。

「助けて」

無意識に、そう口にしていた。ふんっと大きく鼻で笑うモコ。

「ま、助けてやれな」こともないけど

「けど？」

「誰にも言ひなよ」

低く、静かに囁く。田の黄色さがさつきより濃い。

返事をしようと口を開くより先に、ふ、と鋭い風が吹き抜けた。今までとは違う風。ぬるくない、冷たい風。

それを受け、彼女はゆっくり立ち上がる。

長い髪を黒い雨みたいに垂らし、僕を見下ろして、ふりふりと

大きく深く息を吐いていく。体から全ての空気を出すぐらい深く。

ふりふりとこじう細やかな音が、ゆっくりフォードアウトしていく。

やがて、その音が完全に消える。

モコは真一文字に口を結び、強く目を瞑った。そして。

ずずずずずうつ。

一気に吸い上げた。

「わ」

あ、から、わ、に変わった僕のリアクションはさておき。

僕を包んでいた黒もやが、掃除機に吸われる綿ぼこりみたく、びゅんびゅん彼女の口へすっ飛んで消えていった。みるみる失せる重たさ。指が動く、足が動く、全部動く。

「…………んふ」

体感一秒そこらで全部吸い終えたモコは、小さくつめきながら手

で口を拭っていた。この吸引力の掃除機があるなら僕は買つ。

「よし行こ」

言つが早いがモコは僕の手を掴み、力いっぱい走り出す。引っ張られるままに僕も走る。そこでようやく気付く。僕は腰が抜けている。抜けたまま引っ張られるとどうなるか。簡単だ。数歩進んで、すてんと前のめりに転んだ。この間わずか五秒。

そして、六秒目。

耳をつんざく轟音が、僕のすぐ後ろで響いた。

激しく上下に揺れる地面と僕と僕の視界。

振り返る。目の前に、『ごりごり』と横倒れになつた桜の木。そして、『ごりごり』う巻き上がる桜吹雪と砂埃。

エジプトに春が来たみたいだ、とぼんやり思った。

「まさに間一髪つてやつだな」

腰に手を当てモコ。

「そだね」

腰抜けっぱなしで僕。

「うし。じゃやるかー」

袖まくりしながら、モコは巨人を真正面に捉え、仁王立ちした。何をやるのかと訊く暇もなく、彼女はさつきの何倍も何倍も大きく大きく息を吐き、吐いた量に見合つだけ、ずはあああつと豪快に吸つた。

いやさすがに、だ。僕は冷静に考える。

巨人相手じや、さつきの綿ぼこりみたいにはいかないだろう。こんなのは、一息に吸える量じゃない。それに、もしかしたら彼は吸い込まれながら抵抗するかも知れない。例えば、この大木を掴んで振り回したり、ぶん投げたり。そうなると腰が抜けてる自分は逃げようがない。

緩やかに、僕が今日二度目の死を覚悟した、その瞬間。

すっぽん。

はつきり、すっぽんと。

巨人は僕の目の前で、あっけなく吸い込まれていった。

昔、NHK教育のアニメで見た、金闇大王に名前呼ばれて瓢箪に

吸い込まれる孫悟空、確かにこんな感じだつた。

「……うー、苦し。砂飲んじつた」

顔をしかめ、痰の絡んだ中年男性みたいにげほげほ激しく咳き込むモコ。それから唾をべっぶと吐き散らし、キャップを急いで開けて、ぐいぐい中身を飲んでいく。彼女のおなかの中には今、「一ラ」とおばけと桜と砂。朝からこのメニューは間違いなく太る。

それにしても、おばけのカロリー量つてどのくらいだろ?、とかあれこれ考えていって、ふと我に返つた。

そうだ。

僕、この子に命を救われたんだ。今さら、じんわり鳥肌が立つ。生まれて初めて、命を救われてしまつた。

「どした、ぼーっとして」

「いや、あの……ありがと」

「げえふ

感謝に対してげっふで返されたのも、生まれて初めて。

「おし、じゃあ行くか」

「え、あ、うん」

いまだ立ち込める砂埃と桜埃を背に、僕らは並んで歩き出した。轟音を聞きつけ、校内から出て来た教師や生徒たちが、口々に何かをわめいていた。僕らは悠々歩きながら、桜へ群がる彼らと次々すれ違つていく。

「あー、んでさ七十円。ちょい訊きたいんだけど

「なに?」

「一年E組つてどい」

「は?」

ふわ、と長い髪を振り回すようになびかせ、モコは急停止する。そして涼しい顔で、僕の肩にぽんと手を置いた。

「はじめてして」

「え? え?」

「あたし今日、この高校に転校してきたの。よひじく

「あ……そつなんだ」

どおりで見たことない感じだと思った。それにしても転校初日から遅刻とは。そして、転校初日から人の命を救うとは。大物か、この子はもしかして。

「てか、あんたそもそも何年生？ タメ？ 上？ 下？ 先生？」

「先生ではないね、制服だからね。で、僕は一年B組」

「金八だ」

「三年B組だし中学の話だから、それは。ほほかすってないね、うん」

「まあ、とりあえず、セーュー」となんで。色々世話になるかもしないにけど、よろしくー」

「あ、うん。じゃあまあ、わかんないこととか、困ったことあれば、いつでも来て、訊いてくれれば。うん」

「おーおー。優しいなーおい」

ばしばし肩を叩かれる。力が無駄に強くて、一発一発が無駄に重い。叩かれる衝撃で揺れながら訊く。

「あのさ」

「なにそれ」

「逆に、訊いていいかな」

「質問は二つまでね」理不尽に侵される僕の知る権利。

「えと、じゃあ……おばけってさ」

「おう」

「どんな味？」

「ふつ、とモコは小さく吹き出した。吹き出すに合わせて目が細り、細るに合わせて長いまつげが弾む。

恥ずかしい話、その一連をちょっと可愛いというか綺麗というか、そう感じ、僕は普通に見えた。

そうしてそれからゆっくり開くまぶたの下に、真っ黒に澄んだ大きく黒い黒目が現れるのを見た。相当、重複した表現だけど、そのぐらい真っ黒だったので仕方ない。

やういえば、僕の田も黒に戻つただろ？

「どした、じつと見て。あたしの田、やつぱ変？」

「え、あ、ううん」

「変ではなく、なんだか少しひりやましこと思つてこた。言わなかつたけど。

「にしてもどんな味つて、なにそのぐだらねー質問」楽しげにからつと笑われる。

「じめん」僕も釣られてちよつと笑う。

「んーでもまあ、そだなー……おばけの種類にもよるんだけど」

「うん、うん」

「あの黒い煙、ま、いわゆる『悪い気』つてやつで、ビリにでもいるもんなんだけど。味はねえ……いつすーいしょうゆ、みたいな感じ」

「はあ」

体に悪そうだ。とかワルイキつて名前からして間違いなく悪い。それにしても、そんなお祓いしないと浄化出来ないようなものを、ずるずるすぽんぐるそうさまで済ませるのが、この子は。

僕は「うーんうーん」とその他のおばけの味を上手く表現しようと苦戦する彼女に、自然と湧いた一つ田の質問をぶつける。

「あのや」

「なにれ」

「君はその……何者？」

「へ？ あたし？」

モコは手を顎にやり、んーとしばし考え、思いついたのか、ずしと僕の鼻先を指差し一言。

「魔女だよ」

「魔女なの」

「知らね」

そして、へつと一笑した。

悪戯っぽく笑うその顔は、僕の知ってる魔女とはずいぶんかけ離

れていて、なんだか少しだけわくわくした。

2 茶柱が立てばすぐに折る 前編

「君、早くなんとかしなきゃ 憐まじい死に方するよ」
目の前に座る黒服の男が、にこやかに微笑みながら僕に言つ。狭い事務所内を照らす蛍光灯が、ちかちかと不穏に明滅した。何かを碎く鈍い音と、苦しげな低いめき声が聞こえてくる。
僕は何も答えず湯呑みを掴み、ちょっとだけ残つたお茶を、くいと飲み干した。

さて、どうするか。

五月。ゴールデンウィーク明け。

生徒も教師も概ね五月病を患い、校内の雰囲気も郊外の天気もずんと曇つてゐる、週の真ん中水曜日。の、昼休み。

「あたし、あんたと最初に会つた時から、ずーっと思つてたことあんだけどさ」

人がまばらな食堂に、モコの声がよく響く。

桜の木が倒れたあの日、僕が言つた「わかんないこととか、困つたことあれば、いつでも来て」という言葉を、モコは毎日、非常に忠実に守り続けていた。「数学の教科書忘れて困つてる」とか「理科室がどこかわかんない」とか「休み時間することなくて困つてる」とか「なんでこんなに暇なのかわかんない」とか言いながら、本当にいつでも僕のところに来た。一度、授業中に來たこともあった。衝撃を受けた。

ちなみに今日は、「一人で飯食うのって味気なくて、あたし困つてんだけど」ということで、僕はこうして彼女の向かいに座り、別段食べたくもないうどんをすすつてゐる。

「あんたさ、かなり、つかれてるよね」

だらり片肘をつき、頬張ったカレーをもぐもぐしながらモコが言う。

「まあ、やうだね。疲れてると思つ」「う？」

「す、とつゆを一口飲む。味氣ない味が、口にぽんやり広がる。

「なんでそんなにつかれやすいの？」

「朝ごはん食べてないからかなあ」「ここ三年ぐらいたる生活だ。

「は？」

「全然意味がわからない」という顔で、髪をくしゃくしゃやりながらモコが僕を見た。

「あー、違う違う

「え？」

「あたしが言つてんのは、そっちの疲れてるじゃなくてさ」「モコが言葉を続けようとした、そのとき。

後ろから、誰かが僕の首を絞めた。

「ん、う」

「どした？」

「ぐ、かは

「うわ、ひどい出た口から、ぴゅるんって。きたねーなあ、もー」

強過ぎる。

尋常じゃない。

これは人の力じゃない。

そして何より、僕の後ろは、壁だ。

「がふ、が、あ」

「……あ、そーゆーことか」「

僕の断末魔を聞いて、モコはよつやく把握したらしく。

ぱっと一瞬で口を黄色に変え、すりつづりと痰を吸った。

瞬間、僕は苦しさから一気に解放される。息が出来る。頭から血

が下りていく。モコの口はもう黒に戻っている。

「……えふ、げほ

「だいじょぶ?」

「モコ、水を

「ばしゃ、と顔面に水をもらつた。

「水もしたたるつってな

「……」

「んで、話の続きだけど、あたしが言つてゐるのは」

モコが言葉を続けようとした、そのとき。

後ろから、誰かが僕の頭を押さえつけた。

「あ、うわ

背後の見えない手は、僕の顔をうどんに漫せりと巡らしこ力でぐいぐい押さえ込んでくる。湯気が鼻先に触れた。抵抗できない。手も動かせない。意思と無関係に顔はうどんぐ。もう田の前に汁。

「モコ、うどんが、近い」

「うん見りやわかるけど

「がぶ」

ついに顔がうどんに漫った。熱い、と言おひこも口を開くと汁が入つてくる。見えない手は、僕を更にうどんの奥深くへ漫せりと力を込めてくる。溺れる。

「げふ、あ、ぶ」

「うわー、うどんで顔洗つやつ初めて見た、あたし

「ぐ、ぐ」足をばたつかせて、なんとか自分の意思を知らせる。

「ん?あーはいはい、またか」

息を吸う音が微かに聞こえる。それに合わせて、体が軽くなつていぐ。僕は思いつきり顔を上げた。上げることが出来た。顔が熱い。油つこい。ひりひりする。

「七味とか入れなくてよかつたな七月」

「.....うん」入れてたら、確実に田をやられてた。

「にしてもあんたつて、面白いよねー。見てて飽きないつづーか

「.....そりやどうも」

ふと周りを見る。食事をしていった他の生徒らが、変な田にあつた僕を変な田で見ていた。軽い咳とかして適当にこまかす。

「でさ、あたしが言いたい『つかれてる』は、まさに今のそれよ

「それつてどれ」

モコは、握っていたスプーンの先を、とんぼでも捕まえるみたいに僕の眼前でくるくるさせた。

「お前、憑かれてるだろ、ってこと」

「お前、憑かれてるだろ、ってこと」強調した発音だった。

「色々変な目につけてるでしょ、七月。今だけじゃなくて、桜の巨人もそうだし、それ以外にもきっと、いっぱい。どう?」

真っ黒な目が、僕をぎょろりと見つめる。

どう、と言わると、確かにそのとおりだった。変な目には色々、あってる。いっぱい。

たとえば学校で。廊下を歩くと蛍光灯がぱんぱん割れたり、トイレに入ると便器がぐわーぐわーと一斉に唸つたり、放課後一人で教室にいると、がたんと黒板がはずれたり。

ちなみにこれは、小学生のときの話。

中学生になると、『変な目』のレベルは上がった。

廊下で見えない何かに足を掬われて、バック缶をかまし頭を強打したり、シャーペンの芯を代えようと芯入れを引っくり返すと注射針がごつそり出でたり、帰宅すべく靴を取り出した瞬間、びくとも動けなくなつて下足箱で一晩越したり。

そして、高校。

一年ちょっと前の入学式の日、校門をくぐった瞬間、びゅん、と僕の後頭部を何かがかすめ、すつ飛んでいった。

初代校長の銅像だつた。

「……とか、そういう感じのことはあつたけど」

「へー、そなんだー」

モコはカレー（いつの間にか一杯目）をぱくぱく食べながら、至つて平坦に感想を述べた。

「え、なにその普通のリアクション」

「なんだよ、もっとでけーリアクション期待してたのお前。アホくさ」

「いや、そうじやなくて」

自分で話してたつて、いまいち現実味を感じられない出来事なのに、普通に受け流されたことにむしろ驚いた。おばけを食べられる子からすると、大した話じやないのかも知れない。

「つーか、それでよく無事に生きてんな七月」モコのカレー皿から、すべすべ中身が消えていく。それを僕は、ぱーっと見ている。

「無事つていうか……まあ、そつだね、生きてるけど。あんまり無事ではなかつたよ、うん」

「どーゆー」とよ

「実は結構長い間、入院してて、去年。脚折っちゃって、というか折られちゃって」

授業中、突如右脚が、めり、とあらぬ方向に曲がり始めた秋の思い出。思い出すだけで、まだ右ひざがじんじんする。

「そりゃ難儀だーね」

「……他人事みたいに言ひつけね」

「他人事だもんよ」正論をぶつけられた。

そうこうしている内に、ペロリと一杯目のカレーを食べ終わるモコ。ぐくぐく水を飲み干して、とん、ヒップを置き、

「あたし、力になつてやるーか」軽く言った。

「え？」

「なんとかしてやるつづてんのよ」

まっすぐ僕を見る鋭い目。思わず訊き返す。

「そんなこと、できるの？」

「あの方、あなたさ、あたしをなんだと思つてるわけ」「なんなの」

モコは、ずしつと僕の鼻先を指差し一言。

「巫女だよ」

「巫女なの」

「知らね

そして、へつと一笑した。なんか、少しデジャブ。

黒々曇つた夜みたいな放課後。僕は理科室の前にいた。

腕時計を見る。四時ちょい。午^ごとの約束の時間まで、まだわりとある。一息つく。

中からは、何やら騒々しい声。僕は、そろつと木戸を開けた。濃い水道水の匂いがふんと漂い、同時に、熱い声と冷ややかな声の応酬が耳に飛び込んでくる。

「神様はいるんですってば！」教壇右側、強い口調の赤眼鏡男、三田^た。

「どこによ」教壇左側、落ち着いたトーンの女、士条先輩^{じゅうじょうせんぱい}。

「神社にいるんです！ 主に！」

「この前行つた所、いなかつたけど」

「行けば必ず会えるってわけじゃないんです」

「ならアポとつといてよ」

「とれるならとつてますけど、そうじゃなくてですね」

「とにかく私は、そういうオカルティックなものは大嫌いだし、興味もないし、信じてないの。以上」

壇上で言い合つ二人は、僕に何の反応も示さない。

椅子に座つて彼らをまじまじ見ていた、一ノ瀬さんだけが反応してくれた。

「七月くん！」

教室で見るより倍ぐら^二いワット数のある明るい笑顔で、僕に手をぶんぶん振る一ノ瀬さん。動きに合わせて、彼女がいつも首から掛けている金色の鈴が、涼しげに鳴つた。

「一ノ瀬さん、これ、二人、何言い争つてるの？」

「なんかね、雨莉先輩がね、次行く神社で神様見れなかつたら、この世に神はいな^いつて結論付けるつて言つて、三田くんが猛反発してゐる。面白いよねー」

八重歯がちらつと見えるあどけない笑顔と、じろじろした上目づかいで僕を見上げる一ノ瀬さん。その表情が、彼女の前髪ぱつん

ショートカットと妙にマッチして、やたら愛らしく。ゆえにあんまり直視出来ない。田をなんとなくそらしながら、彼女の隣に腰掛ける。

「次行く神社ってどうだっけ？」

「うんとねー、学校裏の丘登つたところある、千歩狗神社だよー、確か」

「千歩狗神社」

「なんかね、呪いの神社、とか呼ばれてるらしいの」

怖いねーと小さく言いつつ、でも一ノ瀬さんはここにしていた。

科学部に入部して一年目。

その活動として、なぜ神社や心霊スポットに週一ペースで出向かなければいけないのか、僕はいまだに解せなかつた。

部長である士条雨莉先輩じじょうあめりいわく「非科学的存在の不在を証明することが、科学の実証へ繋がる」とのことだったが、だからってそんなに足しげく通つことないと想つ。

怪しげな場所に行くか。

怪しげな場所に行くための怪しげなミーティングをするか。

これが部活の全てだつた。実験とか一回もしたことない。

僕が実験器具を見ながら物思いにふけつていることなんて知りもせず、三田と士条先輩は論争を続けていた。僕と一ノ瀬さんは観劇するようなスタンスで、壇上の彼らを眺める。

「先に言つときますけどね、士条先輩。千歩狗神社へはちやんと禊みそぎをしてから行つて下さいね」

三田が神経質そうに赤い眼鏡をずり上げる。それを受け士条先輩は、

「しなかつたらどうなるの。死ぬの」

肩までかかる髪を指先でけだるげに撫でながら、眠そうな田（いつもそういう田をしている）で三田を見る。

「死にます。仮に死ななくとも呪われます」

「なら仮に呪いがあるとして、呪われたらどうなるの」

「災いが降りかかります。事故にあつたり、怪我したり、「というか三田くん。あなたは、私が禊がなければいけないくらい汚れてるって言いたいの」

「そういうことじゃないんですよ俺が言ひてるのは」

「ねね、七月くん」

二人の攻防を見ながら、一ノ瀬さんが小声で尋ねてくる。

「ミソギってなんだろう?..」

「さあ、なんだろう?」

「雨莉先輩、意味わかつてゐよねきっと」

「うん、『禊がなければ』とか言つてなめらかに活用形使ってたし」

「一人とも詳しいよねー、こういうオカルトなこと」

「そうだね。僕ら置いてけぼりだよね比較的」

僕と一ノ瀬さんは、小さく苦笑し合つた。

土条先輩は、口では嫌いと言いつつ、非科学的なものへの興味も知識も、人一倍あるらしかつた。次どの神社に行くか決めるのはいつも彼女だし、今どの心霊スポットが熱いみたいな情報もたんまり持つている。なのになぜ、表面上、オカルト嫌いを装うのか、僕にはよくわからない。

一方の三田は、僕の中学生のときからの友人なのだけど、「高廻ノ野^{たかののみや}宮中の水木しげる」と呼ばれていた人物で、愛読書は遠野物語だつた。そんな彼がなぜ科学部を選び入部したのか、僕はやっぱりくわからぬ。

「まだ僕のほうを見ない壇上の人から、ぼんやり視線を上にのぞます。そこには時計。」

「あ

「ん、どうかした?」

一ノ瀬さんがゆるく首を傾げる。ちり、と彼女の首の鈴が鳴る。

「おばあちゃんちにこいついう猫いたな、そう言えば。」

「えと、僕、今日ちょっと用事あつて、それで部活休むつて言ひに来たんだけど」

「あ、そうだつたんだ。了解、雨莉先輩には私から言つておくな
ふんわり笑顔の一ノ瀬さん。それにしても、すぐ目の前にいる人
に対する言づてを頼むのって、凄くエゴじやない気がする。

まあ、とりあえず用は済んだ。そろそろ行かなきや間に合わない。
ぶんぶん手を振る一ノ瀬さんに軽く手を振り返し、三田と土条先
輩の呪い論争を聞きながら、理科室を後にした。去り際、掃除用具
入れと人体模型が仲良く僕に向かってぶつ倒れて来たけど、ひょい
っと軽く避けた。

「四時半集合」とモコに言われ、現在四時四十分。モコはいなか
つた。というか、誰もいなかつた。カラスだけがぎやあぎやあ鳴い
ている。

狭い千歩狗神社の境内に、僕は一人で佇んでいた。
奇しくも、科学部で話題になっていた神社が、モコの指定した待
ち合わせ場所だった。全然そんなつもりじゃないのに、下見に來た
みたいになつてしまつた。

連絡をしようにも、モコは携帯を持つてない。

僕は途方に暮れつつ、今一度、辺りを見回した。

赤い鳥居。白い石畳。小さい狛犬がちょこんと二匹。四方を取巻
く深い鎮守の森。そして目の前には、狭い境内に不釣合いな巨木。
それに注連縄。どうやらご神木らしい。

そして何より、お社だ。

百葉箱を一回り大きくした程度のサイズ。でも、圧倒的な存在感
と威圧感を放つていた。その理由は。

おふだ、だ。

壁、柱、扉、屋根、注連縄、賽銭箱、鈴、鈴の紐、扉に掛かった
大きな南京錠。その全てを、おふだが覆い尽くしていた。

とにかく全面という全面に、おびただしい数の紙が、びっしり隙
間なく。何百枚。もしかしたら何千枚。だから、お社の色は、ぼん
やりくすんだ白だった。もはや木製なのかどうかさえ、定かではな

いレベル。そんな異様な物体を前に、僕はモ」を待つ。

なるほど、確かにこの風格は呪いの神社と言われてもしょうがない氣がする。そう言えば、禊がないと死ぬとか三田が言つてた。しかし僕は、完全に禊がないで来てしまつた。どうするか。禊ぎたい。禊がなきやいけない。でも、禊ぐつて行為が何を指すのか全く見当がつかない。

とりあえずお参りでもしとけばいいのか。安易な発想で、僕は札だらけの賽銭箱の前に歩み寄る。二つ二つと鳴る石畳。

「……あ

思わず、声が出た。

賽銭箱とお社の扉の間、ほんのわずかのスペースに、男の人人が正座していた。くたびれた灰色の背広を着た、がりがりの中年男性。背中しか見えず、顔はわからなかつたけど、薄くなつていて頭頂部がよく見えた。

この狭い空間に入り込んでいる姿からして不気味だつたけど、何より僕が怯んだのは、彼が頭上高くで、しっかり手を合わせていることだつた。拝んでいる。その手は小刻みにぶるぶる震えていた。この上なく強く、拝んでいるように見えた。

なんだか気付かれちゃいけないような気がして、足音を殺し、男性を見据えたまま、ゆっくりゆっくり後退した。

「おまつとさん」

背後からでかい声。抜けかける腰。振り返る。

黒い髪。黄色い目。白い肌。そしてなぜか赤い体育ジャージ上下を着ている、十三矢モ」。

ざざやあざやあづみさかつたカラスは、いつの間にか鳴き止んでいた。

「どーした七月、震えてんじやん。うちの神社の立派モ」、感動したか

「……」

僕は、ふるふると無言で首を振つた。

3 茶柱が立てばすぐに折る 後編

モコは僕の視線を追い、「あー、あの人は今、気にしなくていい」とだけ言つて、腕を引っ張つた。引っ張られるまま僕は歩いた。通りがけにちらつと賽銭箱を見る。中年男性は手を合わせたまま動かない。モコがじゅりじゅり砂利を踏み鳴らしても反応しない。彼ら田を離さず、僕はただ歩く。お社の裏へ裏へとモコは進んで行った。連れて行かれるままに、歩いて歩いて、前を見る。

体育用具倉庫。そういう見た目の、こじんまりした掘つ建て小屋。

「モコ、こい、なに？」

「地獄の一丁目」

わけのわからない事をしたり顔で言いながら、からからつと戸を開けるモコ。生ぬるい風が中から少し吹ぐ。

目の前には、向かい合う革張りのソファが二つ。その間に木の長机。部屋の奥には、職員室みたいな事務机が一つ。その脇に灯油ストーブ、上にはやかん。

なんというか、町の小さな不動産屋みたいだつた。

「ま、ときどーに座れよ」

モコはソファの一つに深々と腰を下ろし、長机に両脚をどんどん乗つけて、ふんぞり返つた。小汚い事務所の雰囲気と相成つて、その画はまるでやくざ映画。僕は座らず、モコに小声で尋ねる。

「あのモコ」

「なにさ七月」

「えと、あの人は……誰？」

控えめに、奥に見える事務机のほうへ手を伸ばす。

真っ黒いスーツを小奇麗に着こなした、若い男が座つていた。座つてじつと僕を見ていた。にっこり笑いながら。

ぼさぼさ無造作に伸びた髪、胸元に鮮やかに映える真っ赤なネクタイ。そして何より、貼り付いたようなその微笑み。なんだ

が、絵に描いたように胡散臭い。田が山の。田が離せなくなる。山

「は髪をくしゃつとやりながら、

「それ、あたしの父さん」

「え

僕のその声を合図みたいに、男は頭を搔き搔き、立ち上がった。

「どうも初めまして。モコの、父です」

丁寧な口調、優しい声色。深く頭を下げる男性。僕も慌てて頭を下げる。

「あ、えっと、七月那由多です。あの、十三矢さん……色々お世話になつてます」

「もしかして」

父親は、僕の顔の中心をまっすぐ指差した。

「モコの彼氏くんかな」

「え、いや

「そーあたしの彼氏」

否定するより先に肯定された。モコを見る。その顔は真剣そのもの。これは性質が悪い。

「いや、僕、違います全然」

「はは、照れなくていいんだよ」目を細めて笑う父親。

「あの、違うんですけど」

「時に酒はどうだい。飲めるかい?」

「飲めないです、法的に」

「ははは、じゃあ親子の杯はお預けだね」

「すみません。いや、じゃなくて」

「その代わり、結婚前夜にたっぷり飲もう。つい

「えつとお父さん、あの」

「お義父さん? まだ私は君を認めてはないよ

「いや、めちゃめちゃ認めてたじゃないですか

「私がいつ何を認めたのかな」

「今、結婚前夜とか言って」

「誰と誰が結婚するの」

「僕とモコが結婚するんですよ。……え、なに言つてんだ僕」

「ぶつ」

モコから破裂音が聞こえた。見ると、口に手を当て小刻みにひくひく肩を揺らしている。向き直ると父親も、同じ格好でひくついていた。ほどなく起ころる笑いの渦。その中心で唖然とする僕。

「いや、「じめん」「じめん、はは」

黒スーツの男が、苦笑しながら僕の前に湯呑みを置く。

「あ、どうも」

「バカだねー七円」

にやにやしながら、モコは僕の前に置かれたその湯呑みをひつたくり、じぐじぐ飲んだ。

「バカつてなんで」

「だーって、父親なわけないじゃん。見りやわかるでしょ？」

モコに指差され、男は頭をかりかり搔きながら、事務机へ戻った。「まあ……確かにお父さんにしちゃ若いなって思つたけど、僕も」「だろー？ それにあの格好。どっからどー見ても神主じやん」

「いやそれは納得出来かねるけど」

「なんだよ。だつて正装してんじやん。じゃあ神主じやん」「なんだよその論理の飛躍」

「ともかくにも。

男性は、本当にこここの神主らしかった。そして、モコの父親ではなかつた。心底ほつとした。

彼は、モコの叔父 つまり母親の弟らしい。言われてみれば、尖つた目元がモコと似ている、気がする。

神主さんは、煙草をくわえ、マッチを擦りながら僕の視線に気づいた。

「あ、

「どうかしたかな？」

軽く首を傾げた。僕は慌ててかぶりを振る。

「んで、あんた何しにきたんだっけ？」

モコが机上で組んだ脚を、大開きして組み直す。スカートでなくジヤージだから田のやり場に困らないとは言え、とりあえず僕は目をそらした。

「モコが、力を貸してくれるって言つから来たんだけど」

「あーあー、そんな話したね」

くるりと振り返り、モコはソファのへりにひじを付いた。

「ねー九ちゃん。どう思う、こいつ見て」

九ちゃん、と呼ばれた神主さんは、赤々と火の灯った煙草を口から離し、たっぷり煙を吐いて、目を細めた。

「大物連れてきたね、モコちゃん」

「へへ」嬉しそうに笑うモコ。

「彼氏くん」僕を見る神主さん。

「彼氏ではないです」強めに僕。

「君の力を貸してくれないかな」

「……え、僕が逆に？」

「ん？ 逆？」

「いや、僕、力貸してもらえるって聞いて来たんですけど」

「うん、貸すよ。貸す代わりに、君にも貸して欲しい。ギブアンドテイクだね。……違うな、レンタルアンドレンタルだろうか」

柔らかに微笑むその表情は、喋りながらも全くぶれない。僕を見たまま煙草を一ふかしし、神主さんは言葉を続けた。

「彼氏くんさ」

「彼氏ではないですが」

「君、呪われてるでしょ」

思わず息を飲んだ。

恥ずかしい話。

本当に恥ずかしい話なのだけど、僕は、呪われてる。

「呪われてる」なんて荒唐無稽な言葉、本当はどうしようもなく

使いたくないんだけど、でも実際呪われてるので、呪われてる自分を説明するには、呪われるとしか言いようがない。悔しい。歯痒い。何か他の言い方があるなら誰か教えて欲しい。

奇しくも今日、理科室で三田は言った。呪われたら災いが降りかかる、と。事故にあつたり怪我したりする、と。

まさに、まさにそのとおりなのだ。

三田に「お前よく呪われた人の気持ちわかるな」って本当は声を掛けたかったけど、呪われてるなんてバレたら恥ずかしいので踏みとどまつた。それにまあ、すんなり信じてもらえないだろうから。ちなみに。

食堂で、モコは僕を「憑かれてる」と言つたけど、あれは五十点だ。

「呪われてるせいで、憑かれやすくなつてる」これが百点の解答。僕と僕の母しか知らないこの満点の答えを、神主さんは、あっさり突き付けてきた。何食わぬ笑顔で。

「そのぐらーいことはね、見ればわかるんだよ。私は「神職だからね、と呴いて、彼はのんびり数本田の煙草を灰皿に押し付ける。

田の前のソファには、モコに代わって神主さんが腰掛けていた。モコはとすると、扉の前の空きスペースで何やら念入りにストレッチしていた。

訊かれるままに、僕は自分の身に起こつた色々 わざと恥ずかしい言い方をするなら「呪われた半生」 を洗いざらい話した。彼は、特に口も挟まず、軽い相槌を交えながら、黙々と聞いてくれた。その態度に、逆に不安を覚えてしまう。

「あの」

「ん?」

「呪われてるって、その……変じやないですか?」

「まさか。むしろ至つて一般的じゃないかな、ことこの町において

は

一般的。一般的？ 神主さんは笑顔で続ける。

「私はね、あ、これは『力を貸してくれないか』って話にも繋がるんだけど ここだけじゃなくて、この流印町の、ほとんどのお社の神主を勤めてるんだよ」

「ほとんど、ですか

「その数なんと百八社

「百八」桁違いだ。

「多忙なんだよ、こう見えて」

はは、と笑いながら、新たな煙草を取り出し、悠々とマッチを擦る。忙しさを感じさせない身のこなし。

「それでね、百八もお社があると もとい、神様がいると、障らぬ神に障っちゃう人もたくさん出てきてしまつわけだね」

「そういうものなんですか」

「そういうものなんだよ。で、私がお願いしたいのは、君の力でそういう人を……ん、ああ、そろそろ時間か」

ふうと煙を吐きながら彼は壁に掛けた時計を見た。五時ちょっと過ぎ。

がらがらがら、と激しい扉の音。振り返る。

灰色の背広。痩せ細った体。

「あ」

声が漏れるのを抑えられなかつた。

賽銭箱裏の男が、ひょろりと立つていた。

初めて正面から見たその顔は、風邪を引いた鼠みみたいに貧相で、こいつやつて灯りの下で見ても、その表情は真つ暗だった。

「どうも、ようこそ」

わざとらしいほど爽やかな笑顔で、神主さんが立ち上がつた。反射的に僕も立ち上がる。モコは無言でアキレス腱を伸ばしていた。

神主さんは懐から薄い手帳を取り出し、ペラペラめくりながら、

「えー、『予約の

「シメジマです」

口早に遮る中年男性。じめっとした声。ため息程度の音量。

「シメジマさん。それでは、まあ、お座り下さい。あ、彼氏くん、そこ、ちょっと空けてもらつていいかな、ソファ」

「あ、はい」彼氏関連の突っ込みは、一時中断しておく。

事務机のほうにでも行こうと思い、一步踏み出したとき、

「私どうしても呪いたい相手がいるんです。憎くて憎くて仕方ないんです。妻です。妻が憎くてしようがないんです。私に、夫に、主人に、優しくないんです。優しくない。妻が。妻なのに。口から出るのは嫌味と不平と愚痴ばかり。あの日あの声あの態度。娘と一緒にって、娘と一緒にって私を馬鹿にするんです。浮気だ。浮気なんです。浮気」シメジマは滝の早さでまくし立てた。「しているかも知れないんです。いや、していると思います。しています。妻は浮氣をしています。私より」僕は動くのを忘れていた。「遅くに帰つてくることもあった。化粧が濃くなつた。私が寝てからでないと寝ない。憎い。私は妻が憎い。憎いんです。呪い殺したいんです。必死になつてお参りしました。祈りました。お願いしました。呪い殺せるでしょうか。呪い殺

たん。

モコが僕の目の前、机の上に飛び乗った。

なびく髪をゆつくりかき上げながら、シメジマを見つめる黄色い目。

「あたし、あんたみたいな奴って、大っ嫌い」

部屋にきんと響く声。揺れる髪。次の瞬間。

ふわっと羽みたく広がつた黒髪が、僕の鼻先を微かに撫でていった。

モコは跳んでいた。

風を切る澄んだ音。

続く、鈍い、鈍い、鈍い音。

シメジマの顔に、モコの膝が綺麗に入つていた。

ぐり、と揺れる灰色の背広。ゆっくり沈むように床に倒れていった。

「さじと」

そんな田の前の光景一切見ずに、神主さんはソファに腰を下ろした。

「このシメジマさんがね、さつも言つた『障らぬ神に障つちやつた人』の一例だね」

あつけらかんと神主さんが言つ間、モコは倒れたシメジマに馬乗りになり、ありつたけの力で往復ビンタを繰り返していく。ぶし、ぶし、と重い音が響く。

「あ、彼氏くん、とりあえず座つたら。うん」

「……はあ」モコをじっと見据えたまま、とりあえず、座る。

「それでね、私とモコちゃんがやつてる仕事は、平たく言つと、こういう人から呪いなり祟りなりを祓つてあげることなんだけども」言いながら彼が指差す「こういう人」は今、モコに首を絞められ、人間のじゃないみたいなうなり声を出していた。

ふと、神主さんの言葉に引っかかりを覚える。

「あの、シメジマさんは……呪われてるんですか？」

「ま、それはあとで詳しく話すよ。それはそうと七月くん」

神主さんは柔らかな声で、初めて僕の名前を呼んだ。

「君、ここで私たちと一緒に働きなさい」

「え？」

「それが、君の呪いを落とすことに繋がる。間違いなくね」

神主さんは、懐から煙草の箱を取り出し開けた。中を見て「ああ、ないや」と苦笑混じりに咳き、再び僕に田を向ける。モコはシメジマの後頭部を床に何度も打ち付けていた。どん、どん、どんと和太鼓みたいな音。神主さんが、小さく咳払いを一つして、

「それにね まあ、怖がらせたくて言つわけでは、全くないんだけど」

「なんですか」

「君、早くなんとかしなきゃ凄まじい死に方するよ

蛍光灯が、ちかちかつと明滅した。何かを碎く鈍い音と、苦しげな低いうめき声が聞こえる。シメジマの頭骨が、砕けたのかも知れない。僕は見ない。湯呑みを持ち、さつきモコが飲みかけたお茶を、くい、と飲み干す。

さて、どうするか。

「働きます」

自分で驚くほど即答した。

「うん、ならよかつた」

そう呟き、神主さんはよつやく、モコとシメジマのほうを見た。

僕も恐る恐る、そつちを向く。

シメジマは、モコに馬乗られ、ぐつたりしていた。モコは容赦なく、『じすじす』と頬をグーで殴り続けている。動かないシメジマは、ただ野良犬みたいにつなり続ける。モコの長い髪が垂れかかって、表情はよく見えない。

す、とモコが両手でその髪を手早く、頭の後ろで一本に束ね上げた。暗いシメジマの表情がようやく見える。そしてモコの顔も。ちらつと見た彼女の目は真っ黄色だった。いや、境内で会つたときからずっと黄色かつたけど、今、もうその色は黄色というかほぼ金色で、ちかちか明滅する蛍光灯に合わせ爛々と光っていた。

「お、やつと出るね」

神主さんのその言葉とほぼ同時に、シメジマの口から、もはつと煙が出た。煙草の煙みたいな、ふわふわしたものじゃない。蛸が吐く墨みたいな、ねばねばした重たい黒色。

僕が殺されかけた巨人の煙 ワルイキよりもっとどす黒いそれは、一直線になり、するする宙へ上つていった。そしてそのままモコの口へ、つるつる吸い込まれていく。なんだか黒いうどんをすつてゐみたいで、見ていてひどい胸焼けがした。

「う

束ねていた髪から手を離し、口元を押さえるモコ。ぱらぱら、と

髪がカーテンみたいに、一人の表情を隠していく。
「ごぼ。

モコから、詰まつた排水溝みたいな音が鳴る。

同時に、彼女の体が大きく斜めに傾いた。

「モコ」

思わず寄ろうとした僕を、モコは見もせずにただ手を伸ばして制止し、がらがらに掠れた声を出した。

「……こーら、かつてきて」

「コーラ、うん、わかつた」

立ち上がる。出て行こうとする僕に、

「まつて、ななつき！」モコが掠れた声を振り絞つた。

「なに？」

「ペپし以外かつてきたらなぐる」

「……あ、うん」どんな状況でも、こだわりは大事にすべきだと思ひ。

「あたし、ほんっとにああいう奴大っ嫌い。いや別にさ、奥さんが優しくしてくんなといとか浮氣してつかもとか、だから腹立つ殺してやりたいとか、そーゆーのはいいと思うの別に自由だし。でもさ、でもだからって呪うとかマジばかじやねーのって思うの。言いたいことあんなら言やいいじやん面と向かつて。言えないからつて神頬みなの？ なにそれすっげえバカみたい。ほんっとああいうウジウジしたの、あたしほんっとに、ほんっとに」「

「はいはい。モコちゃん、わかつたから、今は休みなさい」

ソファの上に横になり、苦しげにわめき散らすモコの頭を、神主さんはそっと撫でた。

モコは、ううう、と濡れた犬みたいに鳴いて、ソファの背に顔を押し付け、おとなしく黙った。僕が買ってきたコーラをしつかり抱き締めていたのが、なんだか少し嬉しかった。

「さて、彼氏くん」

神主さんは事務机に腰掛け、ゆったり足を組む。笑顔で首を傾げ、「なんの話してたんだっけ?」

「……とりあえず、僕、ここで働かせてもらいます、っていう話を」

「そりだそりだ。うん、よろしくね」

「はあ、よろしくお願ひします」

はたして僕は仕事として何をさせられるのか、全然説明されてないのが不安だけど、やると決めたからにはとりあえず、やってみよう、だつて凄まじい死に方なんてしたくないし。などなど、ぐるぐる考えながら、床でのびているシメジマ氏の顔に消毒用の脱脂綿を擦りつける(神主さんいわく「アフターサービス」)。でも、あれだけ派手にやられたのに、シメジマの顔には傷一つ、腫れ一つ、砕けた部分一つなかつた。それがなんだか逆に怖かった。

「あ

「どうかしたかい」

「いや、あの」

シメジマ氏のだらしなく開いた口元を見ていて、思い出した。事務机に座る神主さんを見上げる。

「あの、僕の目、何色ですか」

「ん?」

細く笑っていた目をぐるっと大きく開いて、神主さんが僕を見つめる。

「黒だよ。今は」

「今は、つてことは」

「うん、黄色かったよ、さつきは。まあ、そりやあそつなるぞ、だつて」

神主さんはゆつくりと、長机の上の湯呑みを指差す。

「飲んだでしょ? モコちゃんの飲みかけ」

「え」

「あ、言い方変えようか。 間接キスしたでしょ？ モコちゃん

と。はは、うん、これはいい」

神主さんは、無邪気にくすぐす笑う。横になつているモコが、鬱

陶しげに髪をくしゃくしゃした。

要するに、そういうことらしい。

桜の木が倒れたとき、僕はモコの飲みかけのコーラを飲んだ。さつきは、お茶を飲んだ。

つまり。

モコが口に付けたものを飲んだり食べたりすると、見えないものが見えるようになる。田が黄色くなる。神主さんいわく、「風邪がうつるようなもの」だとか。なるほど、と思つたけど、その言い方だとなんだか被害を被つてるみたいで、ちょっとしつくりこなかつた。僕としては「おすそわけ」されてるような感覚だつたから。目玉焼きの、おすそわけ。

「じゃあ、明日からよろしくね。今日はどうあえず、もう帰りなさい。一応、神職として忠告しておくけど、君みたいな『寄せ付けちやう』体質の人は、日が暮れたら外に出ないほうが懸命だよ。死ぬかも知れないんだから」

怖いことを笑顔でさくつと言つ神主さん。

大人しく忠告に従うことにして、そそくせと立ち上がる。それに合させて、神主さんが事務机から、すたつと降りた。

「少し送つて行こうか。煙草買いに行くから、ついでにね」

「あ、はい」

「モコちゃん、起きてる？」

僕らに背を向けたまま、モコが微かに動いた。

「……なに？」

「もしシメジマさんが起きたら、七万五千円、もらつておいてね。あ、領収書が必要つて言われたら、私の机の中に入つてゐるから

「りょおかい」

「しかし、人をボコボコにしてお金もらえるんだから、楽しい商売だよね」

涼しげに笑う神主さん。それを見て、今日一番ぐらいぞつとした。

「彼氏くんさ、この神社、千歩狗神社が何の神社かは知ってるかな」「夜みたいに暗かった空は、もう本当に夜になっていた。」

神主さんと僕は、境内から参拝口までの長い長い石段を、並んでゆっくり下りていた。柔らかい風が吹き、周りの林が静かに鳴る。

「えっと、呪いの神社、ですか」

「はは、うん。それ、よく言われるんだけどね、実はちょっと違うんだな。ここは『恨^{うら}』の神様を祀ってる神社。わかるかな、『コン』」

「いえ、わからないです」

「恨はつまり、自分の気に入らない人をうらむ心。煩惱の一つなんだけど、シメジマさんはすっかりコンに取り込まれてたわけだね。呪われた、というよりは祟られたんだな、うちの神様に」

うちの神様、という言い方に、なんだか只ならぬ神聖さを感じた。神主さんは、足取り軽く石段を下り下り、僕に笑顔を向ける。

「仕事上、呪いも祟りも一緒にたに処理してるんだけど、この二つは似てるようで全然違う。違い、わかるかい？」

「……祟りは、神様とかから受けるもので、呪いは、その」

少しだけ口ごもる僕を、神主さんは立ち止まり、静かに見つめた。

僕は慎重に言葉を続ける。

「呪いは、人から受けるもの、だと思います」

「うん、正解。だから君も」

せや、と木々が波みたいにざわめく。

「……君も、誰かに、呪いをかけられたんだよね？」

誰かに、呪いを、かけられた。

僕は小さく頷いた。

それを見て、神主さんが静かに言葉を進めていく。

「自分を呪つた相手が誰か、知ってるのかな」

「知つてます」

「うん、そりゃ。それは、今は言ひにくい?」

「……まあ、はい、ちょっと」

「うん、プライベートなことだしね。ま、言いたくなつたら話してもらえると、助かるかな。君の力になるためにも」

「……はい」

神主さんは、ふわりと微笑み、「ああ、そうだ」と呟いた。

「君には教えておくけど、モコちゃんもなんだ」

「え?」

「モコちゃんも、呪われてるんだよ」

声も出せなかつた。僕はただ黙つて、少し頷いた。

「ただ、彼女が君と違うのは、自分が誰に呪いをかけられたのか、知らないこと。というより　彼女は、自分が呪われてるってこと自体、知らない」

「それは……教えてあげないんですか」

神主さんは薄く微笑み、くるり背を向け、のんびりと石段を下りだした。かつ、かつ、と澄んだ音が夜に響く。

「深い呪いつていうのはね、自分で考えて、自分で見つけて、自分の力で打ち碎かなきや祓えないんだよ。だから君も、自分で考えて、自分で見つけて、自分の力でなんとかしなさい。私は、そのための道を、少し用意してあげるだけ。覚えといてね」

「……はい」闇に同化しかけている黒いースツの背中を、じつと見つめながら返事をした。

それからは、無言だつた。風と木々と靴の音を聞きながら、ただ下り続けた。行きに一人で上つたときより、少しだけ長く感じた。

石段が終わり、参拝口の真つ白い大鳥居をくぐつたところで、神主さんが口を開いた。

「モコちゃんは君に会つて、君を連れてきた。それには何か意味があると思つ。君にとつても、モコちゃんにとつても、もしかした

ら、私にとつても。……とこりわけで、改めてよろしくね、彼氏ぐ
ん」

「彼氏では、ないです」

あはは、と明るく笑つて、神主さんには僕に向かつて片手を伸ばした。そろそろと僕はその手を握り返す。思つていたよりも暖かい感触。うつすら月と街灯の光が落ちた彼の顔は、ほのかに白くておぼろげで、この上なく神職らしく見えた。

じつくり見るとモロのに似ているその口が、にこりと笑みを携えたまま、ゆっくり開く。

「十三矢九介です。あ、私の名前ね。ま、九ちゃんとか、適当に呼んでくれていよい。それから

細めていた目をくりっと開き、

「お義父さん、と呼んでもらえれば、感無量だけど

悪戯っぽく歯を見せて、神主さんは笑つた。

4 桃の缶詰は開かない

朝。学校が始まる、一時間以上前。

僕は、千歩狗神社の事務所にいた。

「おはよう。なんだか朝早くから来てもらつて悪いね」

ソファに腰掛け、柔軟な表情を浮かべる神主さん。

昨日と同じ、上下黒スーツに赤ネクタイ。そして、昨日と同じ點

り付いたような笑顔。

「じゃあ早速、初仕事、お願ひするね。まあ、簡単なことだから心配しなくていいよ」

その言葉が逆に不安を煽る。無意識に、シャツの裾を強く握り締めていた。

「『あれ』を使って、やれる限りのことをやって欲しい。これだけで、わかるよね？」彼氏くん

す、と神主さんが、的を射るように僕の後方を指差す。怖かった。

彼が指差す方向を見るのが、怖かった。

簡単なこと？ やれる限りのこと？

ぐつぐつ湧き上がる不安を懸命に抑えながら、おれる、おれる。

振り向いた。

「……え？」

壁に立てかけられた、竹ぼうき一本。

「すつ

「あむ

「んうづ」

陽射しがぎらりと照り返す境内。

モコは、金魚みたいに口をぱくぱくしながら、四方八方の空気を、吸つて吐き吸つて吐きしていた。その手には、昨日、僕が買つ

てきた「一郎」がぶらぶら揺れている。完全に炭酸抜けてるな、あれ。
ざつ、ざつ、と竹ぼうきを使ってやれる『簡単なこと』を、『や
れる限り』やりながら、モコに尋ねる。

「さつきから何やってるの、

「そーじ」

「掃除？ それは今、僕が」

「ちがうちがう。あたしにしか出来ねー掃除。ワルイキ吸ってんの
なるほど。呪いの神社の異名を持つだけあって、ここは悪い気が
相当蔓延してるらしい。僕には当然、全然見えないけど。

「あー」

モコが僕を見て、突如、『一郎を』『くべ』やり始める。

「え？」

と発した瞬間、モコは僕に向けて口からびふびふと霧を噴射し
た。ワイシャツが一瞬で茶まだらになる。

「うわ、え、え、なに」

「ワルイキがあんたにまとわりついてたから、追い払った」
「……あ、そう」にしても何か他にやり方あるだろう。

「ごめんびっくりした？ お詫びにこれやる」

はい、とモコは、『一郎』に付いていたおまけを差し出した。

台に乗った小さな車のフィギュア。車種は軽トラック。台座には
「世界の名車シリーズ全十種」という刻印。そのカテーテンでなぜよ
りによつて軽トラをエントリーさせたのか、製作者の意図がいまい
ち解せない。

「ほらほら。軽トラだよ、あんたの好きな

「えと、いらない。好きでもない」

「あそ、あたしもいらない。でさ七月」

「うん」

「あたしのほう、もー掃除終わつたよ」

辺りを見回す。『』神木から散つた真緑の葉が散乱している石畳。

「『』めん僕のほうは、まだ

「つたぐ、とろいなー。そんなどからあたしの気持ちにも気付かねーのよ」

「……え、なにその急に意味深な」

「スキナノニー」

「うわ棒読みだ」

「ほんとに、好きなのに」

「うわ……わ……ん、えと」

見たこともない、女の子女の子した表情のモコ。から、一瞬でいつものモコに戻る。

「ふ。んへへ、あーおもしれ七月」

そして、くすくす笑いながら賽銭箱に乗つかり、どすんとあぐらをかいだ。冗談だとわかつていながら少し汗ばんでしまった自分。もう少し、からかわれ慣れようと心に決める。

モコはそんな僕の気を知る由もなく、というかもはや僕に興味もなく、ふわあとあぐびしながら賽銭箱の上で横になっていた。まさに神をも恐れぬ、といふか。

「あのさモコ」

「なんだよお」

「今さら気付いたなんだけど……こここの賽銭箱、大きくない？　なんか、お社のサイズに反して」

「これ、九ちゃんの意向。あの人、金の亡者だよ」

賽銭箱が大きければお賽銭が増えるというわけでもないだろうに。のんびり気持ちよさそうに目を瞑るモコを傍目に、掃除を続ける。風が吹き、集めた葉が少し舞い、お社を覆うお札たちが一斉に、ペラペラ小さく捲れた。

「ぱとり、と。

小さなお札が一枚剥がれ落ちた。葉っぱに加えてお札にまで散られると困る。慌てて近寄り、拾い上げた。

『四年一組　おおみなももこ』。

うつすら黒く、そう書いてあった。小さく整った、習字のお手本

のよつな字。裏には安全ピン。これは、お札じゃなくて。

名札。

「そこ」、邪魔だからどうしてくれませんか」

細くて鋭い、針のような声がした。咄嗟に声のほうを見る。

お社の角、柱の陰に、背の低い少女が佇んでいた。

黒い半袖ワンピース。白くて細い腕と脚。肩まで伸びた髪は真っ

黒で、ほつそりした顔は真っ白。

まるでオセロみたいな女の子だった。

「邪魔です」

あどけない見た目と裏腹に、凜とした声。女の子は、僕のまん前へてくてく歩いてきた。

「邪魔なんんですけど」

「あ、ごめん」慌てて脇へ退く。

少女は流れるよつに、からから鈴を振り、ぱんぱん拍手を打つた。その間も、モコは賽銭箱の上に寝転がつたままで、なんだかモコが拌まれてるみたいに見えた。

手を合わせ、じつと頭を下げるままの女の子。その姿に、昨日のシメジマさんの姿が被り、はつとした。恐る恐る、声をかける。

「あのさ、えと……ここ、あんまりお参りしないほつがいいかも知れないよ」

じわっとめんどくさいうに頭を上げる女の子。目が皿つ。

「なんですか」

「えと、なんて言つたらいいのかな……あんまり良くない神様がいるんだよ、ここ」

「なんの神様ですか」

恨を司つてる、なんて言つてもわけわかんないよなと思い、ちよつと説明を噛み砕く。

「ええと、呪い、って知つてるかな」

「知つてます」

「あ、知つてるんだ。ここ、その呪いの神様、みたいな神様がいて

「知つてます」

「あ、知つてるんだ」

「ね、お嬢ちゃん。あんた、誰か呪いにきたの？」

賽銭箱に寝たまま、モコが声をかけた。

「そうです」

「へー。誰よ？」

「お母さんです」

「そりやまだどうしご」

「……死んじやえぱいって、思つて」

女の子は、そう呟いた。パンチのある発言で、僕は少し田の前がちかちかした。

「なるほー。んで、今日初めて来たの？」

対するモコは、どうともない様子でからつと少女に尋ねる。

「三日前から、毎日来ます」

「あはは、熱心でいいじゃん。で、効果出た? 呪い」

「……それなりです」

「それなりつてどれなりよ」

「入院してます、事故で」

僕は無言で衝撃を受けた。

「えーマジで? ジヤ効き田あるんだこい。知らなかつた」
自分とこの神社じゃないのか、と言いたくなるのを抑える。
「でもせー、入院つてだけで、まだ死んではないんでしょ?」
「……まあ、はい」

「それつてあれじやねーの。お嬢ちゃんの……お嬢ちゃんなんて名

前?

「桃子です」

「おー、あたしモコつていうの。すげー近いね、へへ」

モコは起き上がりつて賽銭箱から飛び降り、少女に近寄ると、髪をわしゃわしゃ撫でた。少女 桃子ちゃんは、居心地悪げに体をよじり、顔をしかめていた。

「よし桃子、これもなんかの縁つてことで、せにプレゼント
わざの軽トラを取り出すモコ。どうしても誰かにあげたいら
い。

「……いるないです」怯えたような声。

「そー言わずに、ほれ」ぐい、と桃子ちゃんの体に押し付けた。
ぱんっ。乾いた音。

桃子ちゃんが、モコの手を握っていた。

僕の頭の横をかすめ、「こ神木の根元まで軽トラがすり飛ぶ。

「ありや」払われた方の手で髪をくしゃ、とやるモコ。

「あ……すいません」

「いや、いいけどね、別いらぬーし」

ちらりと軽トラのおもちゃを一瞥して、モコは言葉を続けた。
「でだ、桃子。効果が出ないのはお前の、念か、力が足りなんだよ」

「なんですか、それ」

「念てのは恨みの量。怨念。わかるか？ おんねん」

モコは言いながら、桃子ちゃんの鼻先を指で軽く押す。

「よく、わからないです」顔を振り、指を振り払う桃子ちゃん。
「つまりお前、毎日ひりして呪いに来ながら、ホントは殺したいと
か、そこまで本気で思つてねんじやねーのつてこと」

「……そんなことないです」

桃子ちゃんは目を伏せた。ありていな例えだけフランス人形み
たいなまつげが、目の下に薄く影を作っていた。

「なら足りないのは純粹に力だ。靈力。靈感。靈能力。幽靈とか見
たことある？ 桃子」にやにやしながらモコが訊く。

「……幽靈ですか？」

「そ、ゆーれい。おばけ。ひらめisha」

桃子ちゃんは口をつぐみ、意図がわからないとこで皿でじつヒモ

口を見て、

「と、いうか、お姉さんたちは何しに来たんですか？」

「あ、あたし、こここの巫女なの。神様に仕える女。どう、すげーだ

る」

胸を張るモコ。訝しげな桃子ちゃん。

「で、そっちは彼氏。あたしに仕える男。どう、いまいちだろ」「……えつと、彼氏ではなくて、仕えてもなくて、いまいちって言

うのは地味に傷ついた。うん」感じたことを素直に言つてみた。

「それはそうと桃子、手伝つてやるつか、呪つの。……あたし、こう見えて結構あるのよ靈感。なにせ魔女だから」

「へへ、と笑うモコ。僕は混乱した。人を呪うなんて大嫌いとか、シメジマさんに言つてたのに。

桃子ちゃんは眉間に小さく皺を寄せて、

「なんですかその嘘。魔女とか、すごく嘘っぽい」

「嘘じやねーんだなこれが」

「じゃあ証明してください」

「あーいいともさ。よく見てろよ」

証明、といふなんだか子供らしい要求を受け、バキバキ手の指を

鳴らしながらモコは周りを見て、

「うし、あれでいいか」と、ご神木へ歩み寄つた。

そして、おもむりに右腕を伸ばし、灰茶けた幹に手のひらを押し当てる。

すう、と深く息を吸う音。

直後。

「わ」

桃子ちゃんと僕は、綺麗にハモつた。

むくむく、ぽつぽつと、音こそしないけど、まさにそんな風に、木の枝先につぼみが付いて、すぐ花になつていく。いくつも、いくつも、いくつも。こんなのが見れば誰でもハモる。

呆然と眺めること、数十秒。

柔らかに咲く満開の桜と、夏みたいに突き抜ける五月晴れといつ、ちぐはぐな光景が出来上がつた。

「……モコ、こんなこと出来たの」

「うん、巫女だし」

「魔女って言つてたじゃんわつせ」

「仕事は巫女、アフターファイブは魔女」

「午前八時だけね今。いや、てか、何をどうやつしたのこれ」

「あんたに黄色い目あげると一緒に」

「……えと、ごめん、よくわからない」

「ワルイキ吸つて腹に溜まつてた力を、ぐぐぐつて手を云つて木に分けてやつたの。そんだけ」

「そんだけ、と言われても、そんだけ感が僕には全然湧かない。果然としている桃子ちゃんに、モコがバシッと指を差す。

「見たか桃子。あたしの魔女っぷり。靈力全開つぶり

「……見ました」素直に頷く桃子ちゃん。

「つーわけで、あたしが力貸したげる」

「昨日、同じようなことを食堂で言われたのを思い出す。僕に貸してもまだ貸せるぐらい、モコは力に溢れてるらしい。でも貸すつてどうするの、モコ」

「桃子のお袋をあたしが呪つ」

「モコは真顔で／＼サインを掲げた。

「……でもお姉さん、私のお母さん知らないじゃないですか」

「あたしは見ず知らずの奴でも呪える。呪い殺せる」

もう片方の手でも／＼サインを出すモコ。蟹みたいだけど顔は至つて真剣だ。

「さ、どうする桃子。半信半疑な僕の七月を呪つて実演してやるけど」

「はは、冗談でもやめてモコ」

「あの、信じます、けど」

そう言って桃子ちゃんは俯き、黙り込んだ。

桜の花びらが、ほんの数枚、ちらちら舞い落ちる。しばらく桃子ちゃんを見ていたモコは、ふつと一息つき、

「ま、いいや。とりあえず放課後にしよ。あたし、さつきので疲れ

ちやつたし。それに呪うにはそれ相応の準備もいるしや。だから夕方、またおいで桃子

と、微笑んだ。桃子ちゃんは、黙つたままだつた。

「おし、学校行こ七月。遅刻すんぞそろそろ」

「へ、あ、うん」

「ご神木の根元に置いといた鞄を、モコがぽいと僕に投げる。キヤツチし損なつて落としてしゃがんで拾つていたら、モコに腕を掴まれる。

「すんすんすん」と引つ張られ、境内を後にした。いつもこいつして腕引っ張られてるな僕と、ほんやり思つた。

石段を降りながら振り返る。強い風。舞い散る桜吹雪と緑の葉。その中で静かに佇む桃子ちゃんの姿が、ゆっくり視界の隅から消えていった。

「昼休み。久々にモコからの誘いがなく、三田と一緒に昼食をとつた。

「あのさ七月、さつきお前、なんでカレーに顔突つ込んだんだ急に」「……なんだろ?、ダイレクトに、カレーを感じてみたくて」とか喋りながら教室に戻ると、僕の机に藁がざつさり積んであった。

「藁だな」三田が言つ。

「藁だね」僕も言つ。

「七月、ちょっともうつていいか

「え、うん」

三田はむんずと藁を一掴みして自席に戻り、机の上に丁寧に敷いて、その上に突つ伏し寝始めた。三田のこうこう動じない性格が僕は結構好きで、だから中学の頃から長く付き合つてゐるんだと思つ。で、とりあえず僕は、藁には触れず椅子に座つた。座つてみてわかつたけど、藁の積まれ具合はたつぱり鼻先まであった。馬の餌みたいな量。動物園みたいな匂い。

「七月くん、おかえり。なに食べた？」

前の席に座る一ノ瀬さんが、ひょつこり藁の陰から顔を出した。

「えっと、カレーだよ」

「わー、いいなあ。なんだかお腹減ってきた」

「食べてないの？」

「食べたよー。おむすび一個」

「え、また？ 一ノ瀬さん、いつもおむすび一個じゃない？」

「うーん、ダイエットなの」

えへへ、と笑いながら、一ノ瀬さんはちりちりと胸元の鈴を揺らした。その音色が藁とマッチして否が応にも牧場を連想させる。

「あ、それでね七月くん、この藁なんだけどね、持ってきた子からお手紙受け取ってるの。これ。はい」

一ノ瀬さんはふわふわした笑顔で、僕にノートの切れ端を差し出した。

『藁人形百個放課後までに』。

細やかで整つていて、でもなんだか有無を言わさない迫力のある字。

「ねね、七月くん、お手紙なんて書いてあつたの？」

「えと、なんか、注文」

「へえ！ なんだか面白そうだねー」

ころころと弾むような笑顔。ここだけの話、僕は一ノ瀬さんのこの笑顔に日頃とても癒されている。自分が呪われてるなんて少しだけ忘れられる、このほんわか感。

「あ、ね、七月くん。お手紙と藁、持つて來た子、誰かわかつてるのはかな？ もしかして」

「まあ、大体。髪長かった？」

「凄く長くてさらさらで綺麗だった！」

「あ、そか、やっぱり」

「すごいね、以心伝心だね！ よく七月くんに会って来るもんね。ね、なにさんつていうの？」

「十三矢さん。E組の、先月入った転入生で」

「十三矢さんだね、覚えた！あのね、私ずつと思ってたんだけどね、近くで見たらなおさら、目が大きくてぱっちりで、肌真っ白で声まで綺麗で、わあ美人だなあって、つい見とれちゃったよー」「そつかあ」本人に伝えたら喜ぶだろうか。

「お友達になりたいなあ、私。なんて、えへへ

照れくさそうにはにかむ一ノ瀬さん。

「うん、いいと思う」

口から自然とその言葉が出た。

思えば、モコが女の子と一緒にいるところなんて見たことがない。というか、僕以外の誰かと一緒にいるところ自体見たことがない。

友達。

余計なおせっかいかも知れないけど、モコと一ノ瀬さんが友達になつたところ、見てみないと、心から思つた。

で、藁の話。

僕は昼休みの残りと授業時間、がつたり藁人形作りに励んだ。作り方なんて知らなかつたので結構思つままにやつてみたけど意外とちゃんと出来てしまつた。才能があるのかも知れない。

ちなみに、一ノ瀬さんが「私も手伝いたい！」と率先して作業を下請けてくれたので、百個のノルマは難なく達成出来た。ついでに言うと僕が作った藁人形を「ここはもつとふつくらさせたほうが可愛いよー」とか言いながら全部手直ししてくれた。なので、思いがけず百体全部、一ノ瀬先生の作品と相成つてしまつた。匠だ。

そして放課後。

モコは新聞片手に賽銭箱に座り、コーラを飲み飲み指示を出した。僕は指示通り境内を走り回り、時にはとんてん釘を打ち、藁人形を設置した。モコいわく「ただの雰囲気作り」だそうだ。にしては凝り過ぎだと思う。

「てかさモコ、その新聞、どうしたの

「図書室から借りてきた。昼休み」

「なんでもた」

「ちょっとね。気になることがあつたつーか」

大きく立膝をついて新聞を広げるモコ。わしゃっと乱雑に捲れるスカート。反射的にすぐ目をそらす僕。

「それより七月」ちよいちよい、とモコが手招きする。

「なに?」ある程度目をそらしながら近づく。と、素早くコーラを口に含むモコ。よぎる「デジャブ。逃げようとする。

「ぶふううううう、と今日一度目。

甘い匂いのする霧を、思いつきり被った。

「……また、ワルイキ?」

「いや今はいなide、いちお予防つて感じで。モコちゃん特製虫除けスプレー」

「……あ、そ」

大体そういうスプレーはさらさら感が大事なわけだけど、僕べつたべただ。

そうこうしながら、夕口が色濃く染まつてきた頃、準備は終わつた。

朝咲いて未だ爛々と咲き続いている桜の幹、狛犬の口の中、手を洗う所（手水舎ちょうすやつて言つらし）の柄杓の中、そしてお社の周囲に、ずらりと打ち付けられ、置かれ、並んだ藁人形。もう誰がどう見ても呪いの神社という風貌。

「あの」

石段の方から、ほつそりした声。振り向く。

桃子ちゃんが、静かに立っていた。顔が少し、朝より青白い。

モコは彼女を見つけるや、手をぶんぶん振り大声を上げた。

「おう桃子！ さつそく始めよー。あたしもう、呪いたくて呪いたくてウズウズしてんだから」

桃子ちゃんは何も言わず、力ない足取りで僕らの傍へ歩いてきた。モコは構わず大声で喋り続ける。

「すげーだろ桃子。お前のために藁人形作って飾りまくったんだよ、あたし」

作ったのも飾つたのも、僕だけど、うん。

「あの、お姉さん……あの…………『ごめんなさい』」

桃子ちゃんは、消え入りそうな声で呟いた。モコは何の反応もせず、賽銭箱から素早く飛び降りた。

「まず練習。見てろ桃子」

近くの藁人形を一つ拾い上げ、大きく息を吸つて目を瞑り、そつとその顔に、唇を付けた。

キスだ、とぼんやり思った。

たくさんの藁人形に囲まれながら藁人形に口付けるその光景は、なんだか異様で、見てはいけないもののような気がして、でもなぜか引きつけられるように、目を離すことが出来なかつた。

す、と口を離し、モコが目を開ける。

「桃子、これの腕、ちょっとひねつてみ」 そう言つて人形を差し出す。

「え……」

「ほら」

怯えたような表情を浮かべ、桃子ちゃんは手を出しそうだった。

「じゃ、あたしがやつちゃお。えい」

ぐに、とモコが藁人形の右腕を指でつまみ、捻り上げた。それと連動して。

「いたつ！ いたたたつ！」

僕の喉から、自分でも引くぐらいの大聲が出た。

右腕が雑巾みたいに、思いつきり絞り上げられる。曲がっちゃいけないベクトルに腕がねじれる感覚と激痛。

「へへ、成功つと」

「お、あ、モコ、お前、それ」

「お？ 七月、お前なんて口利いていいの？ あ？」

にんまりしながら、モコが再び人形の腕に指を掛けた。

「「めん、「」めんなさい」

「へへ。よし、じゃこれは七月自分で持つてて」

ぱい、と人形を放り投げるモコ。驚異的な俊敏さでキャッチする

僕。

「そんじゃ次、本番」

すぐ傍の狛犬の口に咥えさせてあつた藁人形を掴んで取り出し、

モコは目を閉じた。そして、唇を静かに押し当てる。

さつきより、ずつとずつと長い口付けだった。

その間、桃子ちゃんは、モコの制服の裾を何度も弱々しく引っ張っていた。でもモコは全く、反応を返さなかつた。

ただ無言で、何分も過ぎて、モコがゆっくり口を離し、笑う。ぎらぎら光る黄色い目。

おもむろに、モコは藁人形の頭の先を摘んだ。

あ、と桃子ちゃんが小さく声を上げる。

上に引っ張られ、少しずつ藁人形の首が伸びていく。瞬く間。

ぶちん。藁くずが宙を舞う。

人形の首が引き千切れ、ガラスが割れるような音が響いた。桃子ちゃんの叫び声だった。言葉にならない声、音。耳の奥が、きーんとした。

直後。

がつ、と狛犬の頭が、石畳に転げ落ちた。

モコはそれを見て、

「呪う相手、間違つちつた」

静かに呟いた。

静寂。

モコはゆっくり屈んで、ひく、ひく、と不規則に喉を鳴らす桃子ちゃんに、顔の高さを合わせた。

「覚えといて。人のこと呪い殺したいなんて考えるウジウジしたバ力野郎、あたし、死ぬほど大っ嫌いなんだ。……神様ってのはね、そんなくだらない願い聞くために、いるんじゃないんだよ

シメジマさんのときと同じ、いや、それよりもっと鋭く尖った金色の目で、少女を睨んでいた。

「ごめんなさい。か細くて、掠れた声で、でもはっきりと、桃子ちゃんは言つた。それから、何度も何度も、『ごめんなさい』を繰り返した。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

桃子ちゃんが、おそらくきっと百以上の『ごめんなさい』を吐き出した頃、モコは静かに立ち上がつた。

立ち上がり、少女の小さな背中に手を回し、とす、と自分の体へ引き寄せた。

桃子ちゃんはモコのおなかに顔を埋めて、震えるみたいに泣いた。「殺したいって思ったことは、あたしは別にいいと思つ。思うだけじゃなくて本当に殺したつて、あたしは何も言わない。でも、神様なんかに頼るな。自分のことなら自分で進め。……で、やんのか？」

桃子

桃子ちゃんは首を振つた。強く。

「ん、そうか、わかつた。……じゃ、おせつきょおしまー」

モコは目を細め、桃子ちゃんの頭をわしわし撫でた。

「あのさ桃子。これからは、寂しいときは、お姉ちゃんたちが遊んでやるよ」

桃子ちゃんが顔を上げた。真つ赤な目で、モコを心細げに見上げる。

「ほら、そんな目すんな。ほんとだから。てか七月もなんか言えよ」「え、あ、うん。いや、本当に。寂しくなつたら僕らは全然いつでも、うん。大丈夫だから」

正直、僕には桃子ちゃんの抱える事情がわからず、たどたどしい言葉しか出なかつたけど、桃子ちゃんは嬉しそうに微笑んでくれた。どこか大人びた子だとずつと思つてたけど、その笑顔は、はつとするほど子供だった。

「よし、じゃあ桃子。とりあえず、謝らなきゃいけない人んとこ、

行つてここ。今すぐ

「……はい。ごめんなさい」

「あたしじいじめんなさいはいよ。いらない。しつかり謝つて、しつかりやる」とやつたら、またおこで。いいね」「

くしゃくしゃつと強く、モコが桃子ちゃんの髪を撫でた。それをくすぐつたげに受け、桃子ちゃんは「はい」と強く頷いた。

そして、消えた。

氷が溶けるみたいに、煙が空氣に混ざるみたいに、消えた。

消えたって言葉はどんでもなく安易だけど、でも消えたんだから消えたとしか言えなくて、言葉はいつも無力だと思った。

だから結局、僕の口から出たのは、

「わ、消えた」

「わ、芸のないリアクション」

モコは小さく笑つて、「神木に近寄り、幹にもたれながらぺたんと座つた。

「……あの、モコ。桃子ちゃんは」

「消えたよ。自分で言つてたじやんか」

「いや、そうじやなくて。え、桃子ちゃんつて」

「おばけ」

見ちやつた。

見ちやつたどいのか会話しあつたどいのが少し仲良くなつちやつた。いやでも。

「なんで見えたんだよ、僕」

モコは座つたまま、胸ポケットからピンクの手鏡を出して、僕に向けた。

「こ対面」

鏡を覗き込む僕の目は、綺麗な丸い目玉焼き。

「え、え、なんで」

「あたしのコーラスプレー、吸つたからじやねーのやつぱりモーラは油断ならない。そう思った。」

「ご神木の根元に転がっていた軽トラのおもちゃ

桃子ちゃんが

今朝、払い飛ばしたそれを、モコは拾ってじっと見ていた。

冷たい風が吹く。モコの髪がなびいて揺れた。

桜の花びらがひらひら落ちて、モコの頬にぴったり、貼り付いた。泣いていた。

黄色い目からぽろぽろ大きな粒を零しながら、モコはおもちゃを見ていた。声も出さず、拭いもせず、ただじっと、見つめ続けていた。

高橋桃子。

それが桃子ちゃんの名前だった。

モコが図書室から借りてきた新聞、ほんの三日前の朝刊に、その名前はあつた。軽トラックに轢かれて小学生の女の子が事故死した、という小さな小さな記事だつた。

あまりに突然の別れで、孤独で、寂しくて、お母さんのが大好きで、だから一緒にいて欲しくて、でも死んで欲しくなんかないで、殺したくなんかなくて。行き場のない桃子ちゃんは、ただ、神様に祈つた。

そういう話だよ、とモコは言った。

陽は沈み、静かな夜だつた。

僕らは、もう何時間も、並んでご神木の根元に座つていた。

モコは、藁人形に気を吹き込んだことで相当消耗していたらしく、ぽつりぽつりと喋つては、時折俯いて、小さく呼吸を整えていた。

モコがどのくらい力を使って、どのくらい自分の体を削ったのかなんて全くわからなかつたけど、ただ、そのゆっくりした時間は、なんだか僕には心地よかつた。

「七月つてさ、自分の親、好き？」

月が少し高く上がつた頃、モコは宙を見ながら、そう訊いた。少しだけ言葉に詰まりながら、

「うん。好きだよ」

と答える。モロはそつか、と少むく笑って、

「あたしが、親いないんだ」

なんでもないことのよひひと言つた。

何も言えなかつた。

すぐにモロは僕を見て、へへ、と田を細め笑う。

「なに辛氣くせー顔してんの七円」

「え、いや」

「違うの別に。辛氣くさに話がしたいんじゃなくてさ。わかんねーのよ、あたし、あんまり。家族の……なんていうのかなあ、好きとか、そういう感じ」

「んなとき。

「んなとき、どうすればいいのか全然わからなくて、全然考えられないで、どうもしないのがいいのか、何も考えないのがいいのか、そんなこともわからなくて、僕はぐるぐる馬鹿みたいに頭を回轉させながら、ただ黙つて頷いた。

「あんま気にしないで、てきとーに聞いて欲しいんだけどさ」

「うん」

「あたしが、母さん、あたしが十歳くらいのときかなあ、出てつちやつて」

「うん」

「父さんは、生まれたときからこなくつた」

「うん」絶対に、言葉に詰まらなによひひ。

「母さん出てつてから、ばあちゃんところで暮らしてたんだけじ、ばあちゃん死んじやつて、で、越してきたんだけじね。九ちゃんちに」「うん」今は考えるな、と自分に言い聞かせた。

それからモロは、ふうと小さく息をついて、僕を見た。

「だからあたし、ちょっと桃子のこと羨ましかつたつづーか……死んだ子のこと羨ましいなんて、不謹慎か」

ふふ、と笑いながら、両手を高く伸ばして、モロは気持ちよむれやうに大きく伸びをした。

伸びるその手が、僕から見て月とちょうどぴったり重なって、そしたらモコはその手をぐつと力強く握り締めて、ああ、モコは月を掴みたかったんだ、とぼんやり思った。

「七月、呪われてんだよね」

帰り際。

石段を降りきって、白い鳥居をくぐったとき。それまでずっと黙っていたモコが、さうとと言つた。

あまりに急だったので、何も言えずにいると、

「この鳥居、真っ白でしょ？ でもね、昔、黒かつたんだ。あたしがすぐ一ちっちゃい頃」「

モコは白い鳥居に手を付いて、ぺたぺたと触つてみせた。

「母さんがね その頃は母さんいたんだけど 鳥居様は、この神社に来る人たちの「恨」を、吸い取つて下さつてるんだよって言つてた。呪いを防ぐために。……で結局、自分が真っ黒になっちゃつて、ぼろぼろに腐っちゃつて、なんかお人よしだよねー」

懐かしそうに、愛おしそうに、モコは鳥居をゆっくり撫でた。ほの暗い街灯が、細い手の指を照らして、もっと細く浮かび上がらせた。

「じゃあ、今、白いのは？」

僕が訊くと、

「しつくい。母さんが塗つたの。だからこれ、母さんの鳥居」

嬉しそうに、モコは笑顔で答えた。

「あー、でね、何が書いてーのかつていうと 呪いつてのは上書きで消すつてこと。黒くなつたら白く塗る。これ、鉄則。覚えといてね」

上書きで消す。

意味はよくわからなかつたけど、とりあえず、頷いた。

「だからさ七月」

長い髪を手で梳きながら、モコは金色に光る目で僕を見た。

「あたしが塗つてやる。上書きしてやる。七円の上から白このをこつぱい。もし黒くしようとする奴がいたら、あたしが食つよ」

にかつと笑い、モコは真っ赤な舌をペロリと出した。

この子は本当に巫女なのかも知れないと、そのとき初めて思った。

で、後日談。いや、後日といつか当日だけど。

家に帰ると、僕の部屋に桃子ちゃんがいた。

カーペットの上に、ちょこんと正座していた。

「え？　い……うあ、お、え、どうした、の」

五十音アの段を駆使しながら、しどろもどろで尋ねると、

「寂しくなつたらいつでもつて、お兄さん、言つてくれたので……

来ちゃいました」

照れくさうにかみながら、彼女は答えた。

「え、僕……目、黄色い？」

「黒いです」

法則が破れた。衝撃的だつた。

「え、あの……幽靈、だよね？」

「指差すのやめてくれませんか」

「あ、ごめん」

「あと、幽靈だからつて幽靈だよねつて訊くのデリカシーないと思います」

「ん、あ、はあ、『ごめんなさい』失言してしまつた、らしい。

なんで、黄色くないのに見えてるんだらう僕、と訊いてもわかるわけないだらうから、とりあえずそれは明日、モコが神主さんに尋ねることにする。

それにしても幽靈と知つてから見るとなすがに戸惑ひ。しかも自分の部屋だからなおさら戸惑ひ。戸惑いながら、ふと、一つのことを見い出した。

名札。

『四年一組　おおみなもも』と書かれた名札。もも』。

「これ……桃子ちゃんのじゃない？」

ポケットから取り出し、差し出したそれを桃子ちゃんは見て、「いえ、違います」すぐに軽く首を振った。「名前は一緒にどうぞ、私は苗字は」

「高橋、だ」

新聞で見た名前を思い出して、咄嗟に口に出していた。

「……呼び捨てやめてください」

「あ、ごめんなさい」

なら、これは誰のだろう。僕の知らない別の少女が、桃子ちゃんと同じようにお祈りをして、桃子ちゃんと同じような想いをしているのかも知れない。その想像は、あまりにもいたたまれなかつた。ももこ。おおみなももこ。四年一組おおみなももこ。何度も心の中で繰り返し、再び、それをポケットへしまつ。

名札の持ち主が誰なのか。

一つの可能性に辿り着くまで、そんなに時間はかかりなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2837m/>

十三矢モコは黄色い月に唾を吐く

2010年10月8日14時34分発行